



No. 117

ティー・ブレイク

Tea Break

積み木あそび

五月のこどもの日が近づくと、五月人形や鯉のぼりのセールが始まる。最近の景気回復を受けて、売り上げのほうは順調らしい。

けれども、景気回復の最中でも、今の株価の高騰もやはりこれは「バブル」ということで、その終焉を危ぶむ声も聞かれる。そう、この「バブル」というのは、必ず終焉する。なぜなら、人間というのはやはり、膨張した過大評価の中では生きることができず、現実の世界でしか生きられないものだからである。

バブルの後には、現実以上に膨らんだ期待が「現実のレベル」にまで引き戻され、過大評価の部分が大いに反省されることになる。

ところで、五月のこどもの日といえば子供の頃。育ち盛りの頃、小学校の高学年の頃くらいか。体つきが変わっていく仲間を見ては、自分も早く大人になりたいと思ったものである。そうしてその変化が自分にも訪れると、すぐに小さくなってしまふ服を見て、なぜか嬉しかった。親にしてみれば、直ぐに買い替えねばならないので、大変であったろう。

でも、「このあいだ買ったばかりなのに、もう小さくなっちゃったの?!」という母親は、迷惑そうな言い方をしながらも、どこか嬉しそうに見えた。そうした気持ちは子供ながらも分かり、それが自分自身の気持ちと共鳴した。

しかしながら、成長期も永遠ではない。その終わりに近づくとつれ、成長率も鈍化する。

だが、成長期が終わってしまうことを告げて親ががっかりさせたくなくて、また、自分自身もそれが終わってしまうのを認めたくなくて、身長も、靴のサイズも、ちょっと大きめに申告したことがあった。“成長期”というものに対する過剰な期待と過大評価が、そうさせるのである。

こうして子供というのは、他人のために過大申告をすることを覚えていき、それが身につくようになって、大人になっていく。その意味では、体の成長の後に心の成長が来る。そうして大人になると、今度は自分の子供のために、自分が持っている愛情をもって、金銭面での過大供与をすることになる。

今、棚に並んでいる五月人形も、通常的生活水準からすれば、ちょっと上のレベルのように思われるが、それでも親は、子供のためにそれを買っていく。そうした“過大申告”や“過大供与”も栄養にして、子供は成長していく。そしてその子供も、いつしかそうした過大申告ができるようになる。

けれども、親子喧嘩の最も多い原因のひとつは、こうした“一種の嘘”に起因した意地の張り合いなのではないだろうか。私自身も、親に対しては素直になれず、できそうもないことをできると言ったり、ときには大言壮語的なことを言ったりした。それは、親の側でも同じであったはずであり、それはあたかも、どちらのほうが高く積めるか、ということを競い合っている“積み木あそび”の如くである。

そうして、その積み木あそびが終わり、本当に相手に対して素直になれるのは、親が死んだ後である。現に、こうして仏前で手を合わせて、偽りのない現状報告をしている。

鯉のぼりを履いて「人魚」と言った私を見て大笑いしていた母の居たあの日。よくよく思い起こしてみれば、床の間にあった五月人形は、その当時としては分不相応なものであったように思う。

東京では、鯉のぼりをあげるところなどないが、せめて五月人形だけは他よりも良さそうなものを買ってみる。こんなことをしたところで、何が許されるということでもないであろうが。

(正)